

るものあり、「波斯國人拂多誕」と佛祖統記に見ゆるものは、一見人名としてより解釋の餘地なきが如くなれども、余輩は此殘經に偶々同様の名を認むることよりして、或は之れも人名ならざる或語の音譯に過ぎざるなきかを疑がふものなり、今之を論證するに足るべき史料を有せざるを以て、暫らく以て人名と見るの見解に従がふ。

以上余は此の波斯教殘經なるものが、マニ教經典の殘卷にして、暗黒なる東方マニ教義の研究に對して、一大寶典なるを説き、更に其の中の特種の語二三に就いて管見を施こし、以て從來の學者の論議、殊に回紇碑文に見ゆる文字に關して、聊か補説する所ありたり、されど此の如きは此の殘卷の研究に於てはもとより第一步に屬す、其の教義、其の言語、(經中にはシリヤ系の言葉と思はるゝものにして、マニ教の用語となれるもの諸所に存す)等を始め、精細なる研究に至りては、今考がへ得たるもの二三も悉く省略して更に他日の發表を期せり。只だ之れを以て聊か此の珍籍に對する世の注意を喚起するを得ば幸甚しとなす。(完)

(東洋學報第二卷第二號、明治四十五年三月二十一日稿)